








病害虫発生予察情報予報第 6 号 (9 月の予報)


佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
水稲 (早植え)	トビイロウンカ	並	少	152~154	 斑点米カメムシ類	
	紋枯病	やや多	多	143~144		
	斑点米カメムシ類	並	やや少	161~162 180~183		
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	並	少	152~154		 トビイロウンカ
	穂いもち	やや多	多	137~142		
	紋枯病	並	並	143~144		
	斑点米カメムシ類	並	やや少	161~162 180~183		
	コブノメイガ	やや少	少	159~160		
	白葉枯病	並	並	148~149		
<p>1. トビイロウンカ (早植えおよび普通期水稲) 8 月 14~15 日頃に新たな飛来を確認している。ただし、本虫の発生状況は、田植え時期や品種、地域、防除歴の違い等によって大きく異なるため、発生予測図(共通図 1)を参考に、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、本虫の幼虫ふ化揃い期に薬剤防除を実施する(令和 3 年 8 月 18 日付け対策資料第 7 号参照)。</p> <p>2. いもち病 一部で多発生圃場がみられる。葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ後期の穂いもち防除を徹底する。さらに、穂いもちの発生が多くなると予想される場合には、穂揃い期にも防除を行う(令和 3 年 8 月 23 日付け対策資料第 8 号参照)。</p>						
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	200~201 207~209	 ハスモンヨトウ	
	カメムシ類	多	多	201~202 209~210		
	紫斑病	並	並	195~196		
<p>1. ハスモンヨトウ フェロモントラップでの誘殺数がやや多く、今後発生が増加する恐れがある。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。</p> <p>2. カメムシ類 カメムシ類の発生が多いと予想される。被害を防ぐため、莢の伸長初期から子実肥大中期に防除を徹底する。発生が多い圃場では、7~10 日間隔で 2~3 回防除を行う。</p>						
全般 普通作	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	並	やや少	212~213	 ハダニ類
	うどんこ病	並	並	202~204	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	やや多	やや多	206~210	
	アブラムシ類	多	多	217~218	
	<p>1. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） ランナー切り離し後の親株は、早期に処分する。併せて、発病株の発生を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。薬剤防除は、病原菌感染後の散布では防除効果が劣るため、週間天気予報に注意し降雨前に行う。ビニル雨よけ被覆育苗圃場では、有効薬剤を約 10 日間隔で定期的に散布する。ただし、既に発病がみられる圃場や雨よけ被覆を行っていない圃場では、散布間隔を短縮する。</p> <p>2. ハダニ類 本圃へハダニ類を持ち込まないよう、定植前に防除を徹底する。</p> <p>3. アブラムシ類 一部圃場で発生が多い。本虫が寄生した苗を本圃に持ち込まないように、育苗期に薬剤防除を徹底する。</p>				
アスパラガス	茎枯病	やや多	やや多	312~313	 褐斑病
	褐斑病	並	少	314	
	斑点病	やや少	並	313~314	
	アザミウマ類	並	並	316~317	
	ハダニ類	やや少	並	317~318	
<p>1. 褐斑病 一部圃場で発生が多い。通風を図るため、降雨時以外は原則として施設開口部を開放する。発生前からの予防散布を基本とする。発生が確認された場合や、週間天気予報により曇雨天が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする等の対策を徹底する。（詳細は、7月2日付け病害虫対策資料第5号参照）。</p> <p>2. 茎枯病、疫病 8月の豪雨により発病リスクが高まっていることから、浸冠水した圃場等では予防散布や発病茎の除去等の防除対策を徹底する。</p> <p>3. 薬剤散布時の注意点 茎葉が繁茂すると薬液が内部まで到達しにくいので、ノズルを外側からに加え、株内に差し込んで散布したり、株の両側から散布したりするなど、十分な薬量で丁寧に散布する。</p>					
タマネギ	<p>1. べと病、乾腐病 苗への感染を防ぐため、育苗圃のバスアミド微粒剤による土壌消毒を確実にを行う。また、乾腐病菌は、育苗トレイに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、トレイは新品もしくは消毒したもの（付着した土を水洗して除去した後、60°Cの温湯に10秒間浸漬、あるいはケミクロンG 1,000倍液に10分間浸漬）を必ず使用する。</p>				
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ)	多	多	166~168 仔ゴ [*] : 215~217 アスパラガス: 316, 319 苺: 389	 ハスモンヨトウ
	圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	並	並	250~253	 チャバネアオカメムシ
	1. 薬剤防除 本年は生育が早く推移しており、収穫時期が例年より早くなっているため、収穫時期が近づいている品種については、特に、農薬の使用時期（収穫前使用日数）等に注意する。また、隣接する果樹園への農薬飛散防止等についても十分留意する。				
	2. 果樹カメムシ類 発生量や飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来が確認された場合は、早急に防除を行う。				
	3. 夜蛾類 夜温が高くなると夜蛾類の活動が活発になるため、果実の被害に注意する。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるため除去する。忌避灯を設置している園では、点灯時間を日没、日の出の時刻に合わせてとともに、確実に点灯していることを確認する。				
カンキツ	かいよう病	並	並	224~226	 黒点病
	黒点病	並	やや少	222~224	
	ミカンハダニ	並	並	226~227	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	234~236	
	1. 果実腐敗対策 収穫時には果実に傷をつけないよう丁寧に扱うとともに、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。果実腐敗防止対策のための薬剤散布は、収穫 7~10 日前に薬液が霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。なお、薬剤散布後に 100 mm以上の降雨があった場合には再散布を行う。				
2. アザミウマ類 チャノキイロアザミウマによる果実への被害を防ぐために、8月中旬~9月上旬頃の防除を徹底する。特に、高温乾燥が続くとハナアザミウマ類が多発することがあるため、果実の着色始期以降、園内をよく観察し、果実での寄生または被害を確認したら、早急に薬剤を散布する。					
3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。					
ナシ	黒星病	やや少	並	288~291	 ハダニ類
	ナシヒメシクイ	並	並	302~305	
	ハダニ類	並	並	307~308	
1. 収穫後の防除 チュウゴクナシキジラミ、ハダニ類が多発生すると早期落葉につながるため、収穫後も圃場を観察し、これらの発生が確認される場合は防除を行う。特に、園周縁部などスピードスプレーヤーによる散布で薬液がかかりにくい部分では、手散布を実施するなどして防除の徹底を図る。					
ブドウ	べと病	やや多	並	336~338	
	褐斑病	並	やや多	338~339	
1. 収穫後の防除 べと病等の発生が確認されているため、病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	並	少	418~419	 輪斑病 炭疽病
	クワシロカイガラムシ	やや少	やや少	425~426	
	チャノキヒロアザミウマ	並	並	424~425	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや少	やや少	423~424	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	422~423	
	チャノホソガ	やや少	並	421	
	炭疽病	やや少	並	413~414	
	輪斑病	多	並	414	
	<p>1. 輪斑病 発生が平年より多くなっている。本病は、高温期に発生が多く、整枝時の傷口から感染しやすいため、整枝後は直ちに防除を行う。</p> <p>2. 炭疽病 秋芽生育中の園では、降雨が多いと秋芽でも多発する。発生園では、秋芽の充実と翌年の菌密度を抑えるため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。</p> <p>3. 赤焼病 8月の豪雨による葉傷みや枝折れの傷口から感染しやすいため、昨年多発した園については予防防除を実施する。</p> <p>4. カンザワハダニ 秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに薬剤防除を実施する。</p> <p>5. チャトゲコナジラミ 多発した茶園では、葉裏に薬剤が付着しやすいように、裾刈り等を行った後防除を行う。成虫期防除は効果が劣るため、園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。</p>				

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する9月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和3年8月19日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における9月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	40 (24.5℃)	30	並
降水量	30	30 (169.3 mm)	40	並

Ⅲ. 9月の予報

水稲（山間早植え）

定期調査：12 圃場
調査日：8月19日



定期調査圃場の様子（山間早植え水稲）

1. トビイロウンカ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0%（平年 9.2%、前年 52.7%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事を参照。

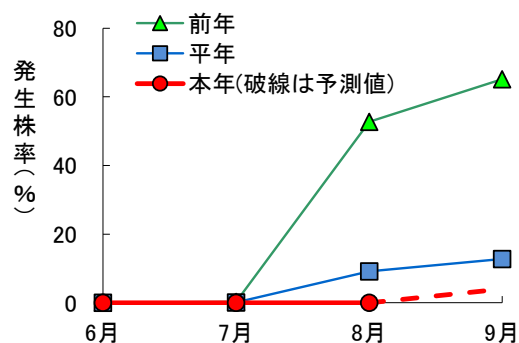


図1 山間早植え水稲でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 1.7%（平年 0.7%、前年 0.7%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

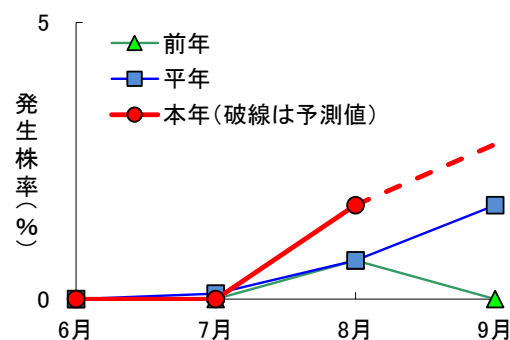


図1 山間早植え水稲での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカス

ミカメ、ミナミアオカメムシ等）

水稲（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稲（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：8月17日～20日



定期調査圃場の様子（普通期水稲）

1. トビイロウンカ

[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年より少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生状況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率0%（平年 5.2%、前年 14.1%）
（ただし、定期調査圃場以外の圃場では、発生を確認している。）
平年比：やや少（一～±） 前年比：少（一）
 - (2) 9月の気象予報
気温は並で、並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

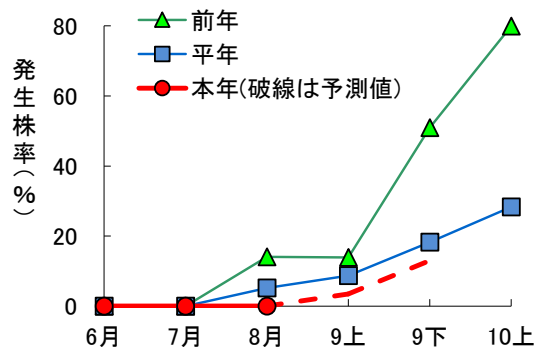


図1 普通期水稲でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）【葉いもち】
発生株率11.3%（平年 14.1%、前年 7.8%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - (2) 9月の気象予報
降水量は並で、並発生の条件
（ただし、平年に比べ晴れの日が少ないと予想されている）（±～+）
 - 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

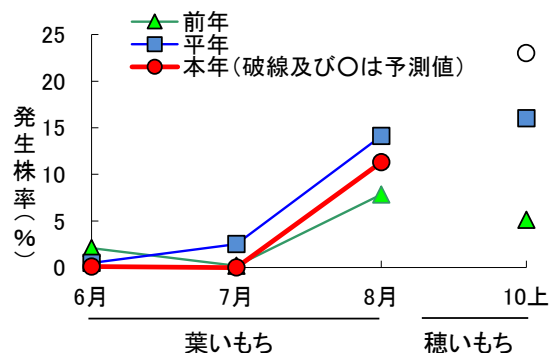


図1 普通期水稲でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率0.1%（平年 2.7%、前年 1.7%）
平年比：やや少（一～±） 前年比：やや少（一～±）
 - ②イネの生育状況（中晩生品種（さがびより、もち品種））
茎数 平年比：並～多（±～+）
 - (2) 9月の気象予報
気温および降水量は並で、並発生の条件（±）
 - 3) 防除上注意すべき事項
各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

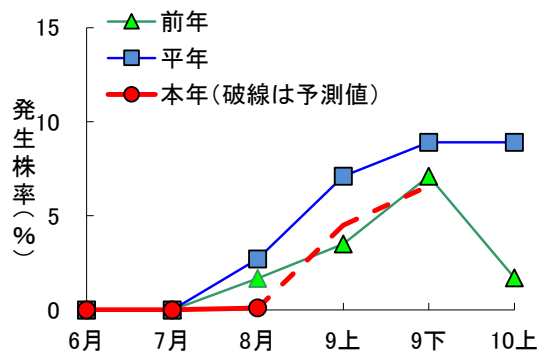


図1 普通期水稲での紋枯病の発生推移

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数（表1）

平年比：やや少く（～±） 前年比：少く（-）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、発生状況を確認する。穂揃い期の20回すくい取りでクモヘリカメムシが5頭以上認められた場合は直ちに薬剤防除を実施する。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果

20回すくい取り虫数（2021年8月17～20日）

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホリハリカメムシ		シラホシカメムシ類		アカシノカスミカメ		ミナミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
鳥栖市三島町	道端	エノコログサ類	0	0	1	0	1	1	1	1	0
佐賀市富士町	道端	エノコログサ類	0	1	4	1	0	0	0	0	0
佐賀市川副町	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	2	0	0
伊万里市東山代	道端	エノコログサ類	0	0	1	0	0	0	2	3	0
多久市南多久町	道端	エノコログサ類	0	0	2	0	0	0	0	2	0
小城市三日月町	道端	エノコログサ類	0	0	3	2	3	0	0	0	0
神崎市横武	空地	エノコログサ類	0	0	2	2	0	0	0	0	0
上峰町	道端	エノコログサ類	0	0	0	0	0	0	2	7	0
本年（平均）			0.0	0.1	1.6	0.6	0.5	0.1	0.9	1.6	0.0
前年（平均）			3.4	14.9	1.5	2.9	0.4	1.0	24.0	19.5	0.0
平年（過去10年の平均）			2.5	6.0	2.2	0.9	0.7	1.0	9.8	3.9	0.03

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

食害株率0.1%（平年10.3%、前年38.0%）

平年比：やや少く（～±） 前年比：少く（-）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に薬剤防除を実施する。

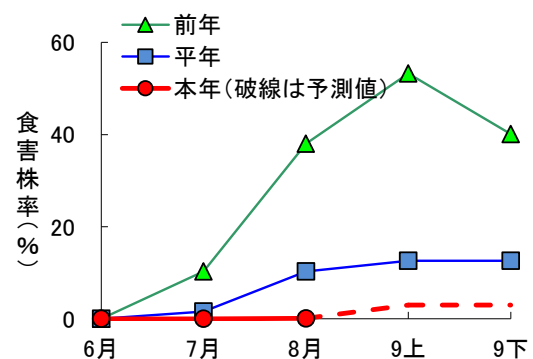
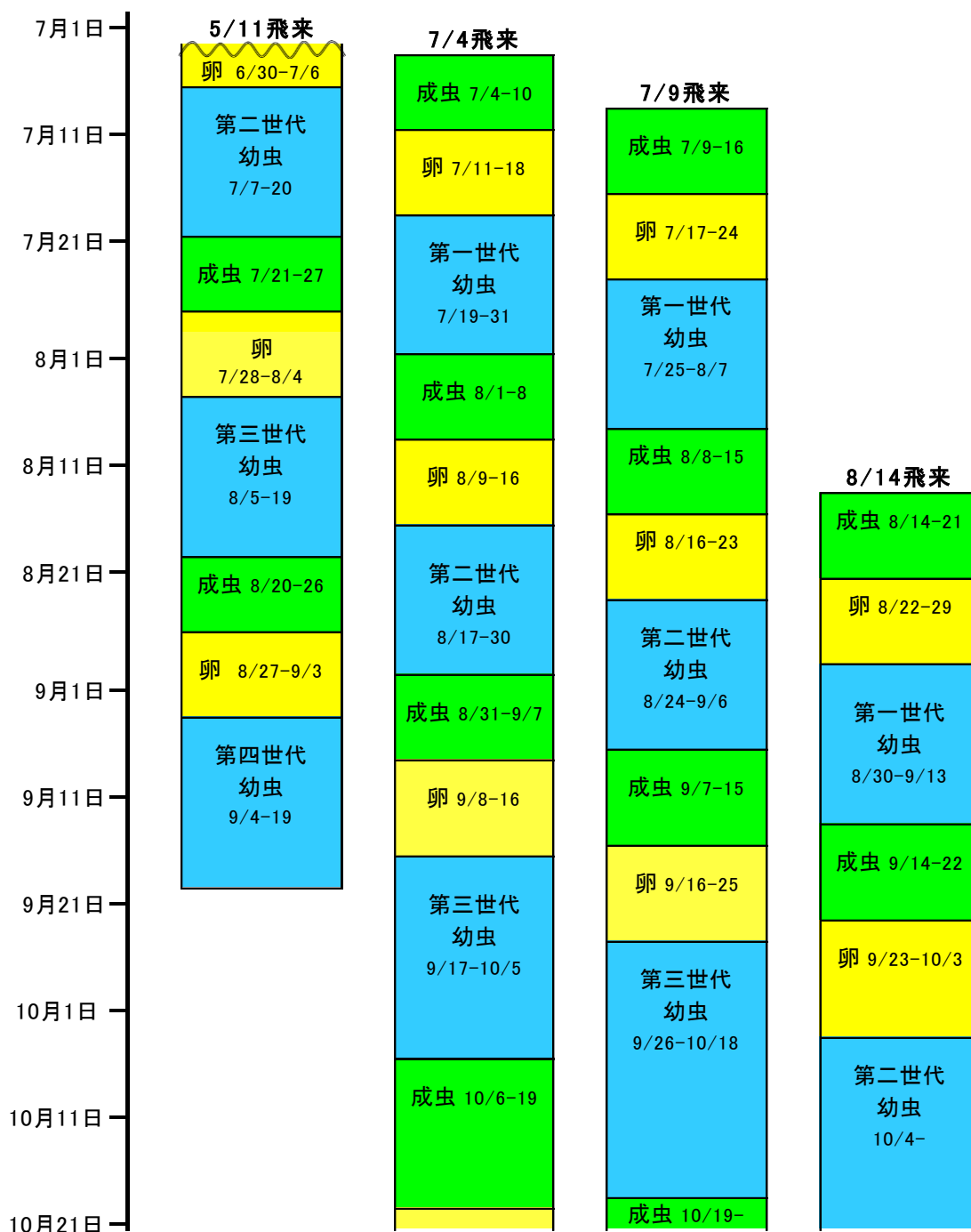


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移



共通-図1 トビイロウンカ各世代の発生予測 (第5版、2021年8月17日作成)

1. 5月11日頃、7月3～4日頃(図では7月4日)、7月8～12日頃(図では7月9日)、8月14～15日頃(図では8月14日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(8月17日以降は平年値)を基に作成した。
2. 田植え時期、品種、地域およびこれまでの防除の違い等によって、本虫の発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
3. 早植え・普通期水稻においては、引き続き7月3～4日頃、7月8～12日頃の飛来虫を主要な防除対象とする。
4. 8月14～15日頃の飛来虫に関しては、中晩生品種を中心に、今後、二世増殖して被害を及ぼす可能性があることから、各地域での発生調査に基づき、必要に応じた臨機防除を行う。
5. 今後の気象経過等に応じて、本図は随時、更新するので、最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：8 月 17～20 日



定期調査圃場の様子

1. ハスモンヨトウ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 0.5%（平年 1.7%、前年 2.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

白変葉発生株率 0.7%（平年 1.0%、前年 2.9%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

②トラップ調査（図2参照）【県内8地点】

平年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。

(2) その他については、特記事項参照。

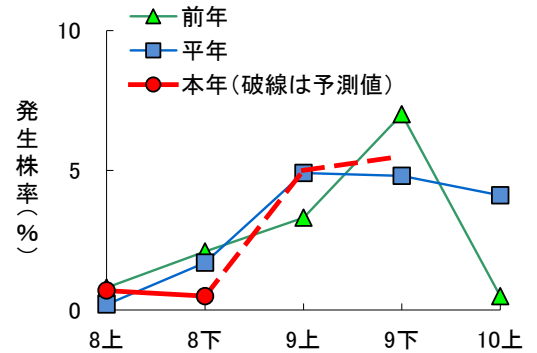


図1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

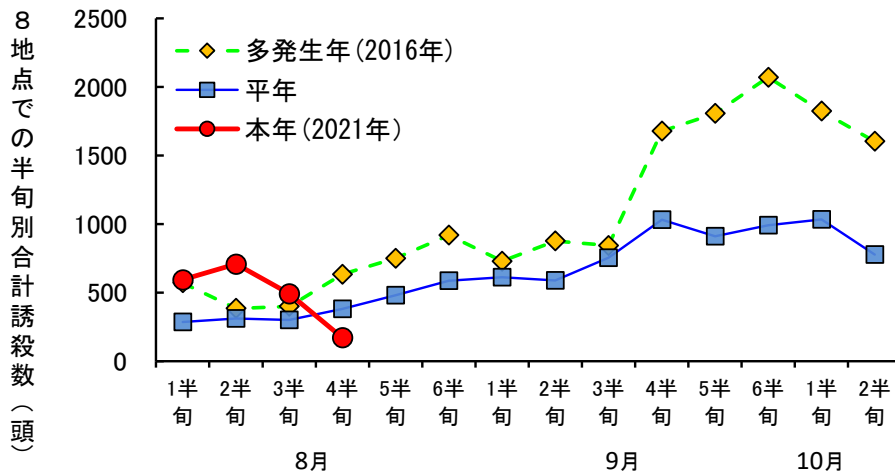


図2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数(8月4半旬まで)
(農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数。)

2. カメムシ類 (アオカメムシ, 仔モンジカメムシ, ホバカメムシ, ミミアカメムシ等)

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率 0.3%（平年 0.01%、前年 0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

(2) その他については、特記事項参照。

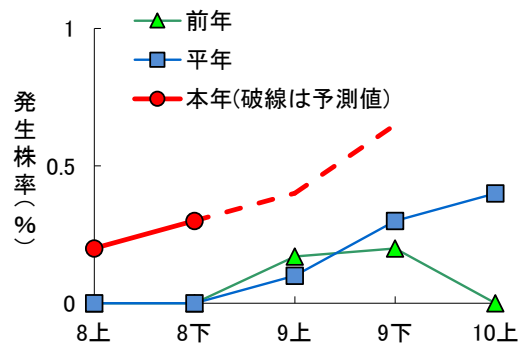


図1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3. 紫斑病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1) 9月の気象予報 降水量は並で、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 若莢期～子実肥大中期に薬剤防除を実施する。

イチゴ（育苗圃）

定期調査：9圃場
調査日：8月17～20日

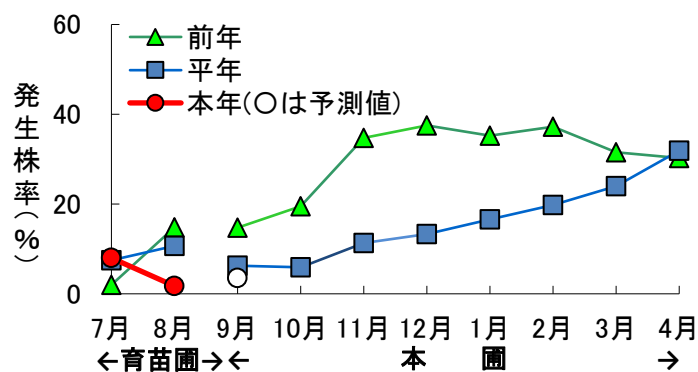


定期調査圃場の様子

1. ハダニ類

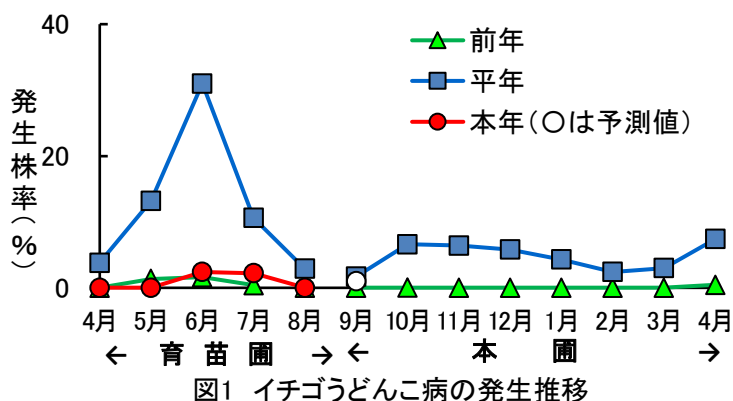
[【概要に戻る】](#)

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
(1) 発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：1.8%（平年10.7%、前年14.8%）
平年比：少〈-〉 前年比：少〈-〉
(2) 9月の気象予報
気温、降水量が並で、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 特記事項参照。



2. うどんこ病

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
(1) 発生の現況
①定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年2.9%、前年0%）
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
(2) 9月の気象予報
降水量が並で、並発生の条件〈±〉
- 3) 防除上注意すべき事項
(1) 感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。



3. 苗立枯症（炭疽病・疫病）

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 子苗での発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率：0%（平年0.0%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②定期調査等で炭疽病汚斑点が確認されている。（±～+）
 - (2) 気象要因
 - ①9月の気象予報
降水量が並で、並発生の条件（±）
 - ②気象経過
8月中旬頃の断続的な降雨により、感染が助長されたと考えられる。（±～+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

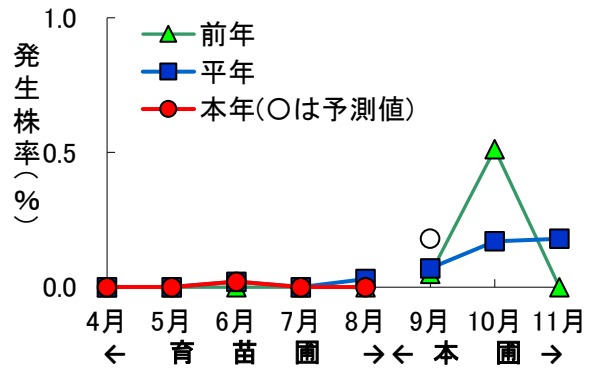


図1 イチゴ立枯症の発生推移

4. アブラムシ類

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生株率：16.9%（平年3.1%、前年3.2%）
平年比：多（+） 前年比：多（+）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照。

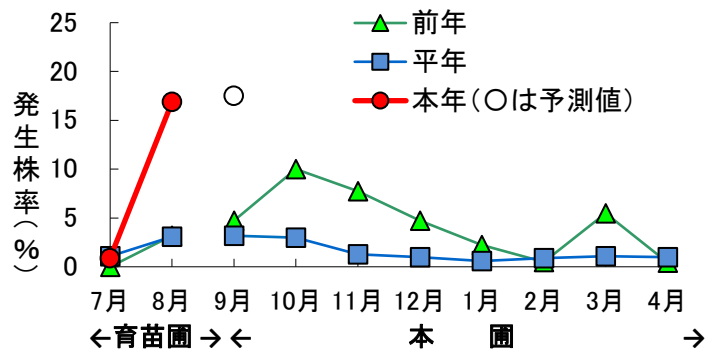


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

定期調査：7圃場
調査日：8月17～20日

[【概要に戻る】](#)

1. 茎枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生茎率：0%（平年0.3%、前年0%）
平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）
 - (2) 気象要因
 - ①9月の気象予報
降水量が並で、並発生の条件（±）
 - ②気象経過
8月中旬頃の断続的な降雨により、感染が助長されたと考えられる。（±～+）



定期調査圃場の様子

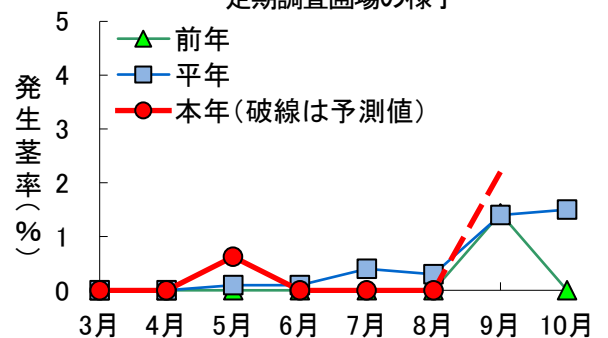


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生茎率：19.3%（平年16.6%、前年50.7%）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

(2) 9月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

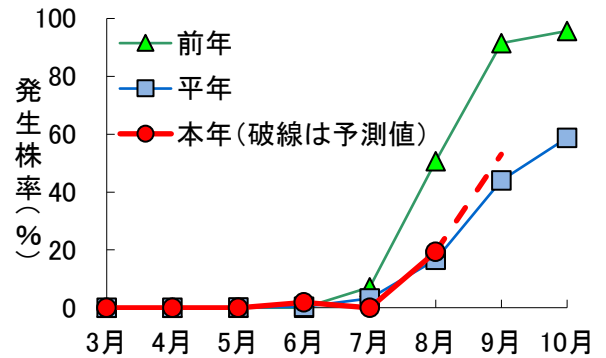


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

野菜・花き共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1、2参照）

イチゴにおける食害株率：4.9%（平年0.4%、前年2.0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

アスパラガスにおける食害株率：0.7%（平年0%、前年0%）

平年比：多（+） 前年比：多（+）

② フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並（図3）。（±）

③ フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺数は、平年より多い（図4）。（+）

④ フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年よりやや多い（図5）。（±～+）

(2) 9月の気象予報

気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

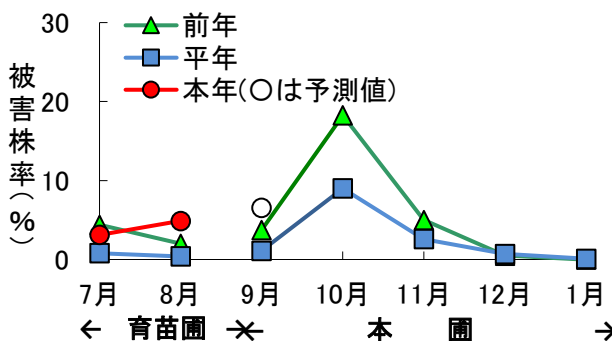


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

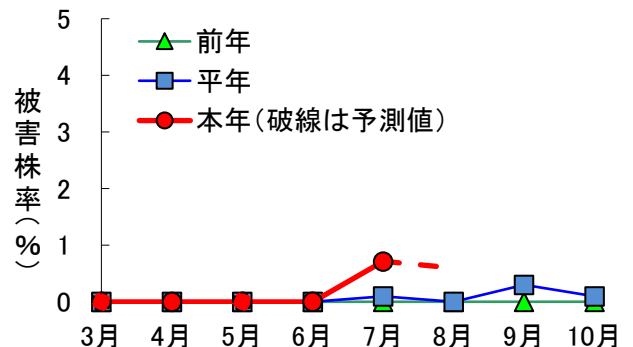


図2 チョウ目害虫によるアスパラガスの被害株率の推移

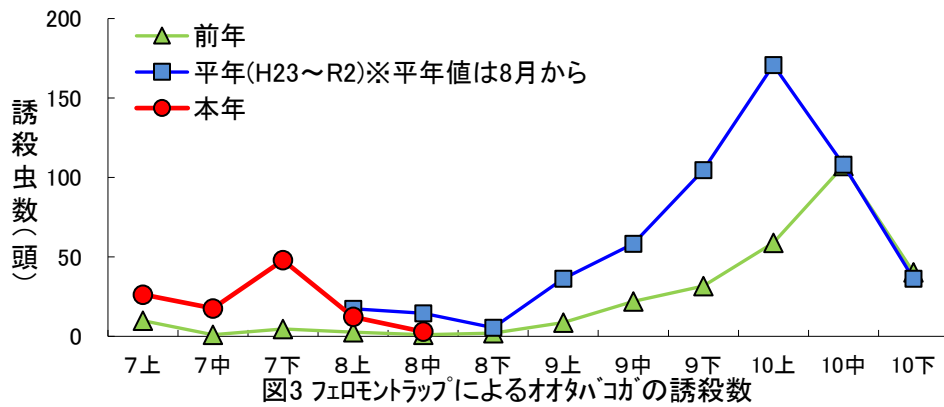


図3 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数 (川副町3地点の平均・病害虫防除員2地点、農業試験研究センター1地点)

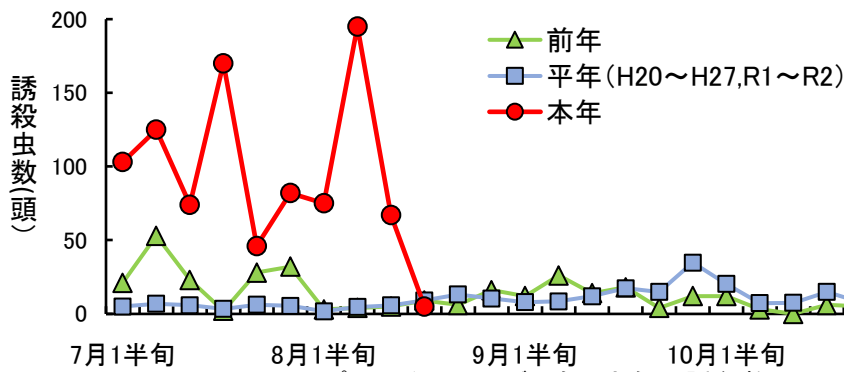


図4 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半旬別誘殺数 (川副町・農業試験研究センター調査)

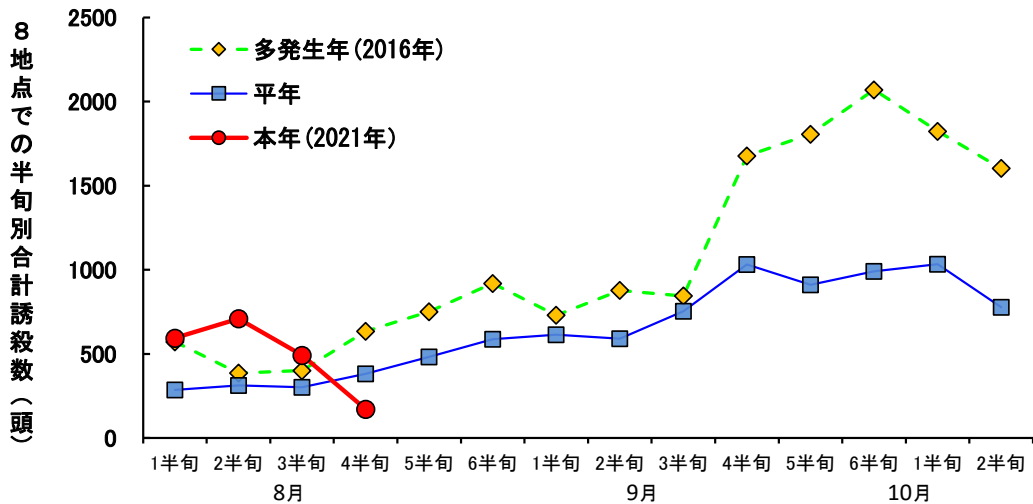


図5 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数 (8月4半旬まで) (農業共済組合、農業試験研究センター調査による県内8地点の平均誘殺数。)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 予察灯（図1参照）

平年比：並（±） 前年比：少（-）

② フェロモントラップ（図2参照）

平年比：少（-） 前年比：少（-）

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1参照、8月17～19日調査）

成幼虫数平均：18.6頭（平年12.0頭、前年13.8頭）

平年比：やや多（±～+） 前年比：並（±）

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数（図4、表1参照、8月17～19日調査）

口針鞘数平均：11.6本/果（平年13.3本、前年21.3本）

平年比：並（±） 前年比：やや少（-～±）

(4) 9月の気象予報

気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

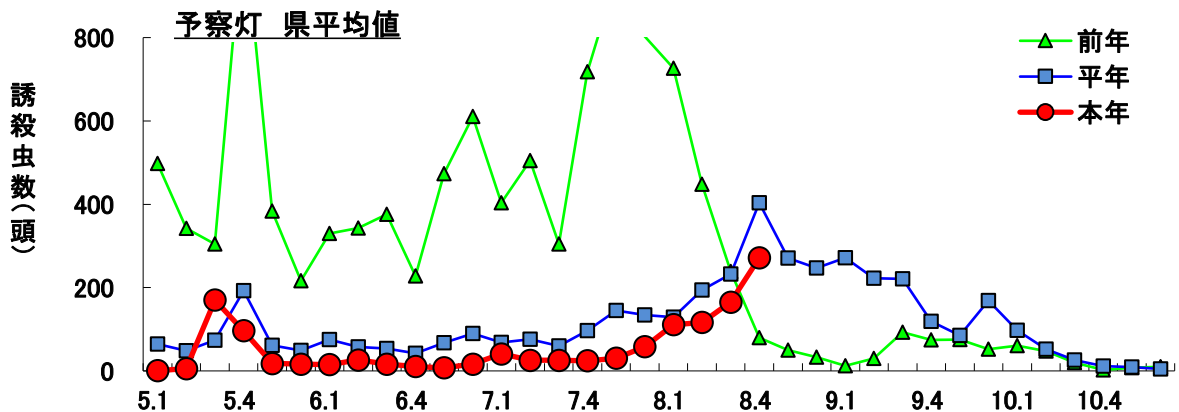


図1 予察灯（佐賀市、小城市（果樹試験場調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推

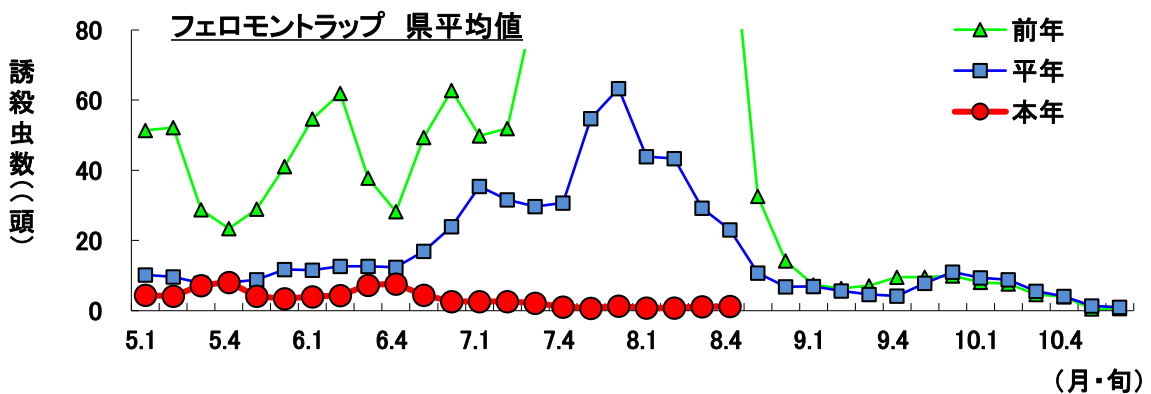


図2 フェロモントラップ（鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町、太良町（病害虫防除員調査）、小城市（果樹試験場調査）、唐津市鎮西町（上場営農センター調査））による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

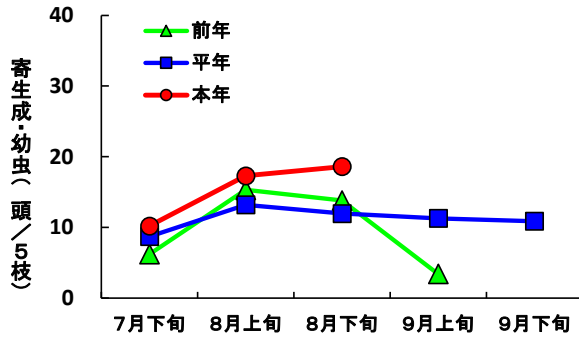


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移

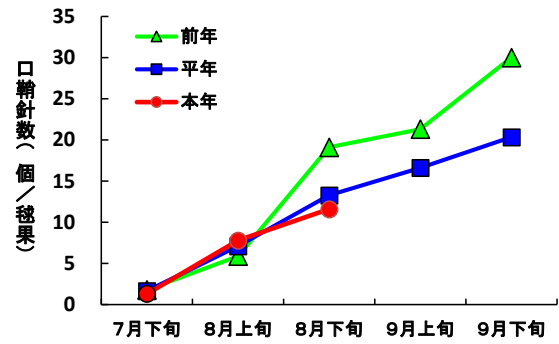


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針鞘数の推移

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針鞘数 (図3, 4に関する地点別の状況)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾			ヒノキ毬果 ²⁾ 着果程度	口針鞘数 ³⁾ 8月中旬
		7月下旬			8月上旬			8月中下旬				
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計		
1	小 城 市	0	0	0	-	-	-	0	0	0	中	9.0
2	唐 津 市 1	3	2	5	-	-	-	1	1	2	やや少	21.8
3	唐 津 市 2	7	0	7	-	-	-	10	0	10	中	4.3
4	唐 津 市 3	10	43	53	-	-	-	9	15	24	中	27.6
5	伊 万 里 市 1	2	3	5	1	8	9	2	2	4	少	13.1
6	伊 万 里 市 2	3	0	3	3	11	14	1	1	2	少	30.0
7	白 石 町	11	0	11	12	13	25	11	41	52	中	5.2
8	鹿 島 市 1	7	6	13	10	6	16	7	34	41	やや少	5.4
9	鹿 島 市 2	4	2	6	12	34	46	18	16	34	中	4.9
10	太 良 町 1	0	3	3	3	2	5	-	-	-	やや少	2.9
11	太 良 町 2	3	3	6	6	0	6	10	7	17	中	3.9
	平 均	4.5	5.6	10.2	6.7	10.6	17.3	6.9	11.7	18.6	やや少	11.6
	平 年	-	-	8.7	-	-	13.2	-	-	12.0	-	13.3
	前年 (R2年)	6.1	0.1	6.2	5.1	10.2	15.3	5.0	8.8	13.8	やや少	21.3

1) たたき落としによる調査

2) ヒノキ毬果着果程度: 福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査

- ・極少: ほとんど結実が見あたらない
- ・少: 梢頭部にわずかに結実
- ・やや少: 梢頭部から中央部周辺にかけて結実した樹と梢頭部にわずかに結実した樹が混在
- ・中: 梢頭部から中央部付近にかけて結実
- ・やや多: 梢頭部から最下部にかけて全面的に結実した樹と全面的に結実しない樹が混在
- ・多: 梢頭部から最下部にかけて全面的に結実
- ・極多: 梢頭部から最下部にかけて全面的にブドウ状に結実

3) 口針鞘数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

4) 各調査日における口針鞘数から離脱予想時期(25本/果に達する時期)を推定

5) 離脱予想時期の県平均は、各調査日および口針鞘数の平均値により算出

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針鞘数は地形等により差が大きいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：8 月 17～19 日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

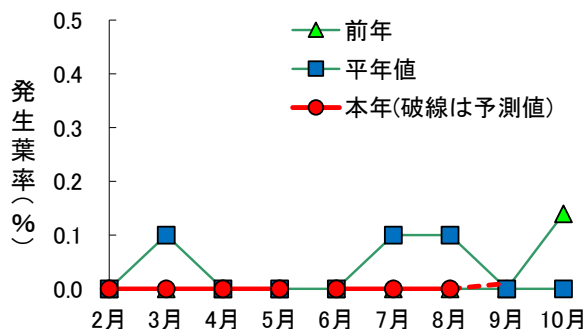


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

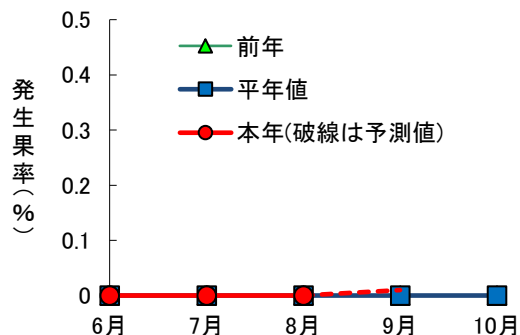


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

(2)9月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1)本病の発生が問題となる園では、無機銅水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。

(2)無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。

(3)発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は、行わない。

(4)台風の影響等強風雨が予想される場合は、襲来 7 日前～前日までに必ず銅水和剤による防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生果率：12.0%（平年 12.6%、前年 9.8%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2)9月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

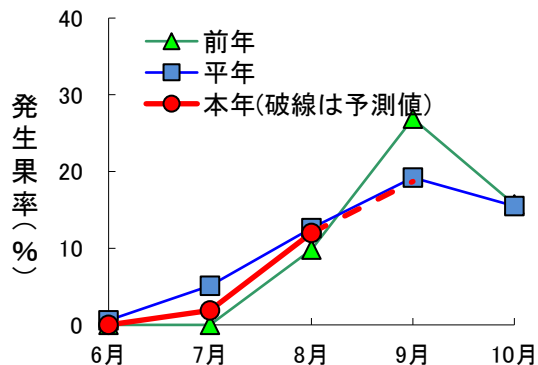


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1)マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が 200～250mm に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後 1 ヶ月を目途に次回の散布を行う。

- (2) ‘せとか’ は黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量 150mm を次回散布の目安とする。
- (3) 枯れ枝、剪定枝、切り株は伝染源となるので除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、ビニルの袋などで被覆して病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉率：0.6%（平年 4.0%、前年 0%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温が並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率 30%未滿または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未滿）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

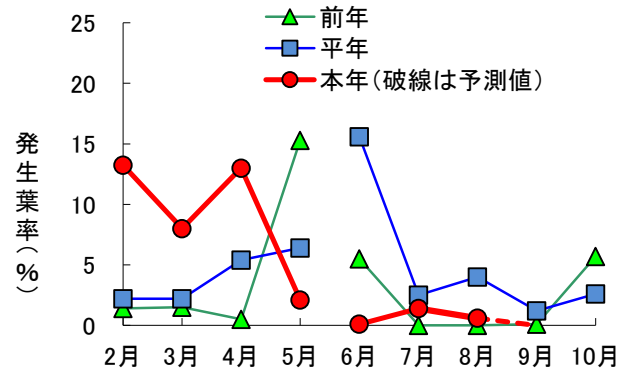


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ 定期調査：7 圃場
調査日：8月18日

[【概要に戻る】](#)

1. ナシヒメシクイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① フェロモントラップ（図1 参照）

平年比：やや少（一～±） 前年比：並（±）



定期調査圃場の様子

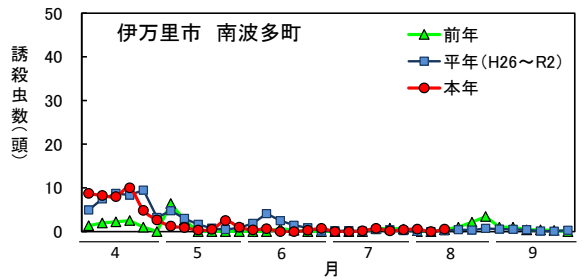
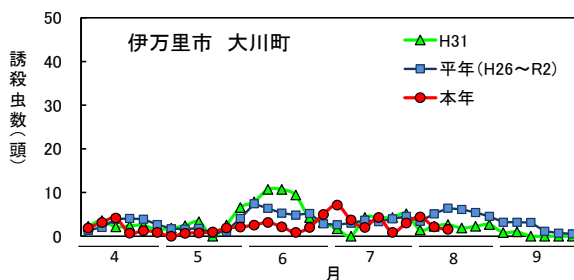
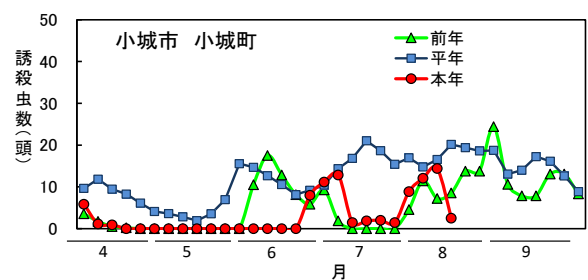
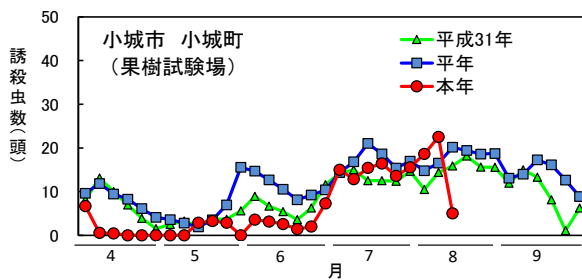


図1 フェロモントラップによるナシヒメシクイの誘殺数の推移
（果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査）

(2) 9月の気象予報

気温が並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 使用する薬剤の選定（収穫前日数や汚れ）には十分注意し、収穫まで7～10日間隔で薬剤散布を行う。
- (3) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10～14日間隔で薬剤防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0.6%（平年8.2%、前年0.2%）

平年比：やや少〈-〜±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温が並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) ハダニ類は高温乾燥で急増するため、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭未満）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。

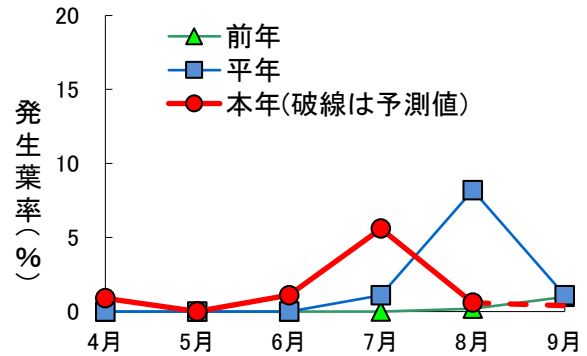


図1 ナシハダニ類の発生推移

ブドウ

定期調査：6圃場

調査日：8月17～19日

[【概要に戻る】](#)

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：6.0%（平年2.8%、前年8.2%）

平年比：やや多〈±〜+〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

降水量が並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は降雨により伝染するので、降雨前の予防散布を徹底する。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。



定期調査圃場の様子

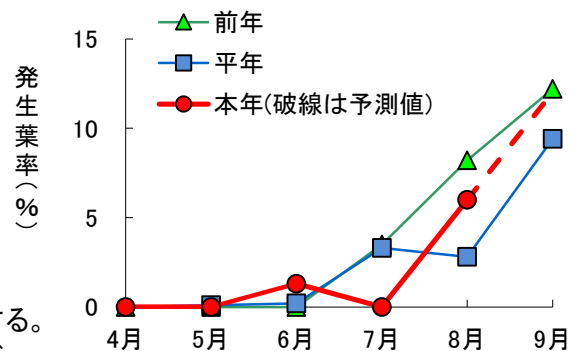


図1 ブドウベと病の発生推移

茶

定期調査：7 圃場
調査日：8月17～19日

[【概要に戻る】](#)



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年より少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
発生葉率：4.3%（平年3.0%、前年1.4%）
平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）
 - ②9月の気象予報
気温は並、降水量は並で、並発生の条件（±）
 - (2) 9月の気象予報
気温は並、降水量は並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

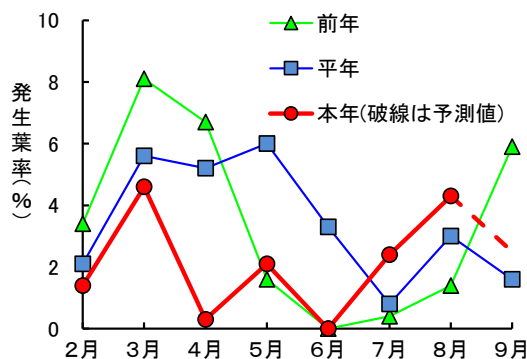


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1は雄繭の発生推移）
寄生株率（雄繭）：2.1%（平年14.5%、前年12.9%）
平年比：少（-） 前年比：少（-）
 - ②9月の気象予報
降水量は並で、並発生の条件（±）
 - (2) 9月の気象予報
降水量は並で、並発生の条件（±）
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 防除適期は第三世代幼虫ふ化期の9月中下旬頃である。
園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期に薬剤防除を実施する。

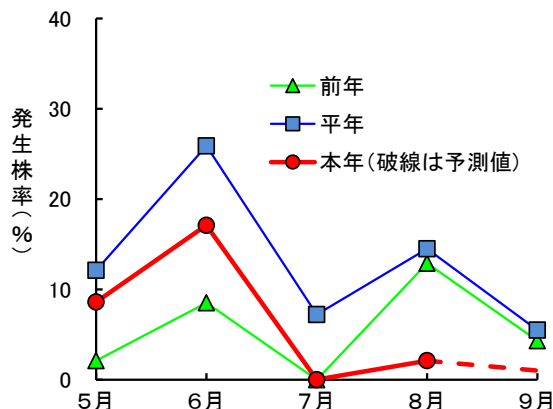


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

- 1) 予報の内容
発生量：平年並（前年並）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査（図1参照）
20回たたきおとし虫数：22.0頭（平年28.4頭、前年21.7頭）
平年比：並（±） 前年比：並（±）
 - ②吸引粘着トラップ（図2参照）
平年比：多（+） 前年比：やや多（±～+）

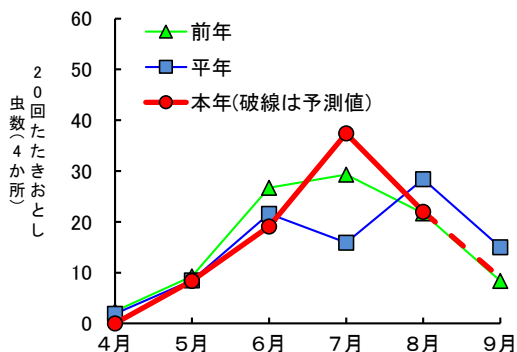


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

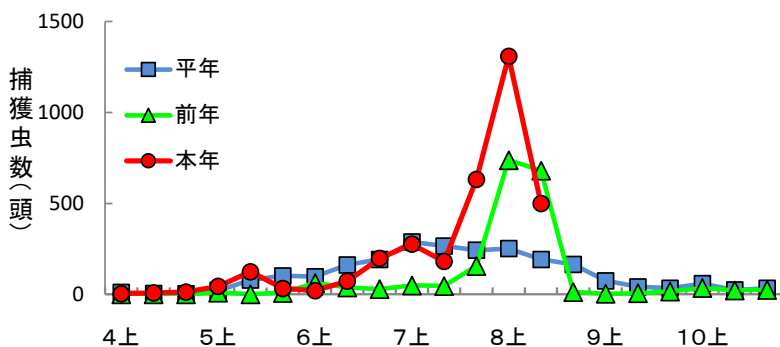


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 9月の気象予報

気温は並、降水量は並で、並発生条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 秋期の被害を抑えるため、発生園では薬剤防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

20回たたきおとし虫数：0.4頭 (平年2.5頭、前年1.3頭)

平年比：やや少(〜±) 前年比：並(±)

(2) 9月の気象予報

気温は並で、並発生条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) チャノキイロアザミウマの項と同じ。

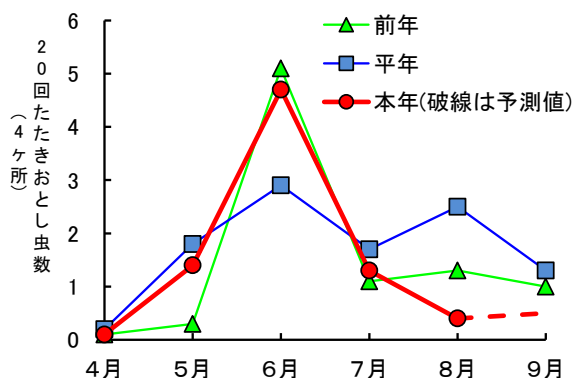


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照、H30より5月調査追加)

発生葉数：0.6枚/m² (平年5.4枚、前年12.7枚)

平年比：やや少(〜±) 前年比：少(−)

(2) 9月の気象予報

降水量は並で、並発生条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

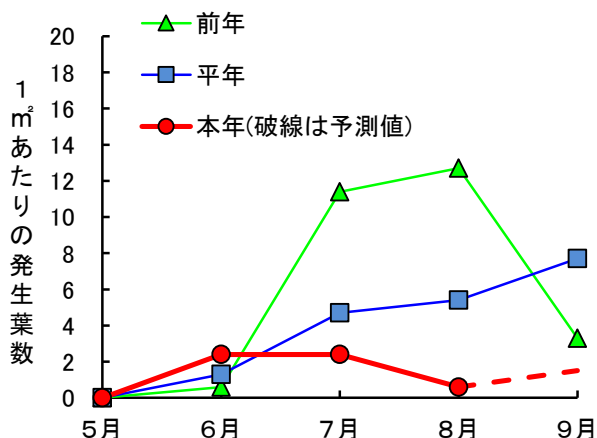


図1 炭疽病の発生葉数の推移

6. 輪斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1 参照）

発生葉数：4.6枚/m²（平年1.1枚、前年3.0枚）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

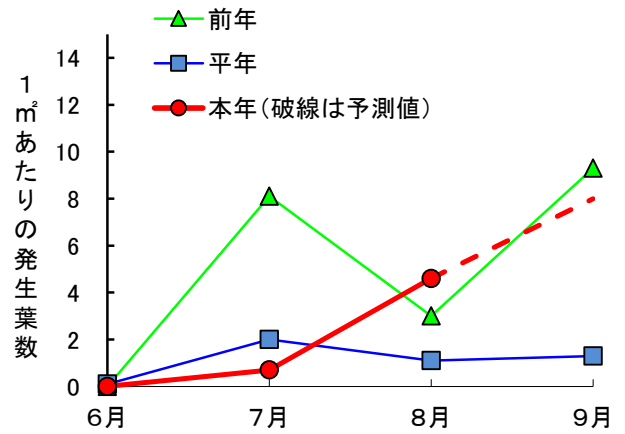


図1 輪斑病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

